

## 建築工学科

---

教	授	岩 田 伸一郎	・ ・ ・ ・ ・	3 9
	〃	北 野 幸 樹	・ ・ ・ ・ ・	3 9
	〃	塩 川 博 義	・ ・ ・ ・ ・	4 0
	〃	下 村 修 一	・ ・ ・ ・ ・	4 0
	〃	永 井 香 織	・ ・ ・ ・ ・	4 1
	〃	廣 田 直 行	・ ・ ・ ・ ・	4 1
	〃	藤 本 利 昭	・ ・ ・ ・ ・	4 2
	〃	師 橋 憲 貴	・ ・ ・ ・ ・	4 2
	〃	湯 浅 昇	・ ・ ・ ・ ・	4 3
	〃	渡 邊 康	・ ・ ・ ・ ・	4 3
准	教 授	亀 井 靖 子	・ ・ ・ ・ ・	4 4
	〃	篠 崎 健 一	・ ・ ・ ・ ・	4 4
	〃	山 岸 輝 樹	・ ・ ・ ・ ・	4 5
専	任 講 師	鎌 田 貴 久	・ ・ ・ ・ ・	4 5
助	教	福 村 任 生	・ ・ ・ ・ ・	4 6
	〃	古 田 莉 香 子	・ ・ ・ ・ ・	4 6



資格	教授	氏名	岩田 伸一郎
<p>(タクシーと救命ドローンによるAED救命ネットワーク)            タクシーと救命ドローンを適材適所で併用する救命効率に優れ維持管理の面においても合理的なAEDの搬送ネットワークの考案とその効果の検証を行なっています。</p> <p>(個別サインのつながりの評価に基づくサイン計画)            明確な設置基準が存在せず煩雑となりがちな大規模駅のサイン計画について、サイン群を情報の内容、デザイン、フォーマットの統一性や連続性に基づいてネットワークとして評価するサイン計画手法の確立を目指しています。</p> <p>(建築の平面構成やファサードのデザイン手法)            空間相互のつながりから生まれる奥行き感や視線の連続性の魅力を定量的に評価する試みから、建築設計における平面構成やファサードデザインの新たな手法への展開を目指しています。</p> <p>(高齢者が活躍する地域社会)            超高齢化時代において、健康な高齢者が重要な役割を担う様々な地域活動や街づくりの活動の実態を明らかにし、活動場所のあり方や地域社会としてそれを整備する方法を探求しています。</p>			
1) Shinichiro Iwata・Yuta Shirahata・Tetsu Yoshida, A Study on Community Support Activities and Their Locations Considered by Older Retirees, Journal of Aging and Environment, DOI : <a href="https://doi.org/10.1080/26892618.2023.2264836">https://doi.org/10.1080/26892618.2023.2264836</a> , 2023年10月			
2) 堀内那央・岩田伸一郎, 開口部の重層性に基づく住空間の視覚的広がりモデル化と評価, 日本建築学会計画系論文集 第88巻 第810号, pp2293~2301, 2023年8月			
3) 渡邊健太郎・遠藤涼平・岩田伸一郎, 駅改札を始点とする歩きスマホの開始要因と継続要因に関する考察 信号待ち滞留行為とパーソナルスペース内の他の歩行者による影響, 日本建築学会計画系論文集 第87巻 第800号, pp1900~1909, 2022年10月			
キーワード	AED救命ネットワーク 生活環境の評価 施設利用マネジメント 高齢者の地域活動		
SDGs17番号	③, ⑪		

資格	教授	氏名	北野 幸樹
<p>「高齢者の地域居住×地域居住者の余暇活動×居住地域・暮らしの愛着 ⇒地域主体の持続的まちづくり活動を育む」の観点から、「人と人」「人と活動」「人と空間」「活動と空間」の相互浸透性に視座を置き、時間の流れの中から生み出されるコミュニティデザイン、継承されてきた生活・空間の秩序と営まれてきた活動と調和する地域空間の持続性等について調査・研究を進めている。</p> <p>繁華街の持続性：日常生活と連関する繁華街の今日的意味、周辺コミュニティとの持続的関係に着目し、新宿ゴールデン街の時間の流れの中での変容と運営者・利用者の相互関係等に注目している。</p> <p>SAD (サスティナブル・エリア・デザイン)：時間の流れと共に変容する概念、社会環境の移り変わり調和する良好で暮らし続けることが出来る空間の創出や持続性の視座から、地域に持続・継承されてきた地域固有の活動・空間・時間を次世代に継承し、再生していくSADとして、地域で取り組まれているまちづくりと連関する様々な活動の実態について調査に取り組んでいる。</p> <p>余暇活動と近隣空間の相補関係：集住環境（人が寄り集まって暮らす）を対象として、集住意識と連関する異なる地域居住者の余暇活動実態に基づき、近隣空間で行われる余暇活動の時間的・空間的相補関係を明らかにすることを目的とし、余暇の視座から生活活動、居住・生活空間、集住意識、持続的まちづくり、自己の属する地域への愛着等の創発関係に関する調査・研究を進めている。</p> <p>持続的まちづくりと連関する余暇空間・環境：人・活動・空間・時間の相互の関係性に基づく、活動者が主体となり得る地域に発生する活動特性・圏域と呼応する良好な空間・機能分布等の計画的な方法論に関する一連の研究として、持続的まちづくりとの視座から継続的に取り組んでいる。</p>			
1) 川原隆平, 宮尾直希, 荻野汐香, 北野幸樹, 繁華街の機能・空間集積と持続的コミュニティに関する研究 その7, 2023年度日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.195~196, 2023.9			
2) 春日紅璃, 北野幸樹, 余暇志向性からみた集住体における居住者意識の変化と持続性に関する研究, 2023年度日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.1221~1222, 2023.9			
3) 吉野嘉一吉, 藤村憲汰, 山本寿晃, 北野幸樹, 地域居住者と自治体の連携による空き家に対する取り組みの動向と特性 その6, 2023年度日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.223~224, 2023.9			
キーワード	繁華街の持続性 (新宿ゴールデン街) 持続的まちづくり・地域コミュニティ・SAD 高齢者の暮らしと周辺地域・福祉環境 居住者参加のまちづくり・空き家への意識		
SDGs17番号	③, ⑪		

資格	教授	氏名	塩川博義		
<p>現在、2021年度から2025年度までいただいている科研費基盤研究（B）「音響解析を用いた金属製打楽器の変遷 - 「うなり」の文化としての東洋音楽史」のテーマを中心に研究を行っている。</p> <p>金属製打楽器である双盤、ゴングおよび風鈴の「うなり」、音高、そして音程を測定して、地域や時代による違いを分析している。また、有限要素法により、ゴングや風鈴の3次元固有値解析を行い、「うなり」のシステムについて検討している。さらに、現在、双盤についても分析を行っている。</p> <p>風鈴は日本の住まいにおける音環境づくりを構成する重要な伝統文化のひとつであり、その音に対する印象評価のアンケート調査を行い、因子分析することによって、日本人の音の感性についても研究を行っている。</p> <p>ゴングに関しては、いままでインドネシアとベトナムが中心であったが、現在、タイとカンボジアにあるゴングについても調査を行っている。また、カンボジアのシュムリアップへ再訪問して、12世紀のアンコール遺跡、バンテアイ・チュマル寺院でゴングのレリーフを7か所発見したので、東南アジア、特にカンボジアにおけるゴングの変遷を再検討したい。</p>					
1) 塩川博義, 中川一人: 双盤の音響特性に関する研究, 日本大学生産工学部研究報告A (理工系) 56巻1号, pp.1-10, 2023.6.20					
2) 塩川博義: 東南アジア大陸部におけるゴングの音響解析, 筑紫女学園大学人間文化研究所年報第33号, pp.191-202, 2022.8.31					
3) 高尾美穂, 塩川博義: 風鈴の音に対する印象評価の因子分析に関する研究, 日本サウンドスケープ協会2023年度春季研究発表会, pp.10-19, 2023.5.27					
キーワード	金属製打楽器    うなり    ゴング    風鈴				
SDGs17番号	④, ⑨, ⑪				

資格	教授	氏名	下村修一		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・地震時における杭の水平抵抗に関する研究 杭の耐震設計における杭の水平抵抗評価に用いる地盤のばね評価を既往の杭の水平載荷試験結果から検討している。</li> <li>・山留め壁の鉛直支持力に関する研究 ソイルセメント山留め壁の鉛直支持力評価方法について土槽実験で検討している。</li> <li>・拡底群杭の群杭効果の検討 土槽実験, 画像解析およびFEM解析により, 拡底杭の鉛直支持力における群杭効果評価法を検討している。</li> <li>・深層混合処理工法における改良土のばらつき低減に関する研究 セメント系地盤改良を対象に, セメントスラリーにファインバブルを混入し, 改良体の強度のばらつきを低減する工法を検討している。</li> <li>・バイプロハンマ工法の支持層確認手法に関する研究 バイプロハンマ工法で打設する杭が設計で想定した支持層に到達したことを施工時に確認する手法について現場実測データを基に検討している。</li> </ul>					
1) 下村修一, 鈴木康嗣: 杭の水平地盤反力係数に用いる地盤の変形係数の統一評価の試み, 日本建築学会技術報告集, 28巻, 69号, pp.621-626, 2022年6月					
2) 下村修一, 鈴木康嗣, 桐谷凌, 道明裕毅: 梁ばねモデルによる杭の水平抵抗解析に用いる水平地盤反力, 日本建築学会技術報告集, 29巻, 71号, pp.121-126, 2023年2月					
3) 下村修一, 鈴木康嗣, 桐谷凌: 実測せん断波速度を用いた梁ばね解析による杭の水平載荷試験のシミュレーション, 日本建築学会技術報告集, 29巻, 73号, pp.1262-1267, 2023年10月					
キーワード	杭    地盤改良    液状化    地盤調査				
SDGs17番号	⑪				

資格	教授	氏名	永井香織		
建設分野におけるサステナブルを材料の面から実現するために主に下記の研究を実施している。					
1) 改修工事における作業環境改善に関する研究					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ レーザケレン, レーザはつり, レーザ切断, レーザによる表面改質等の開発</li> <li>・ 石綿含有仕上塗材に使用する剥離剤の性能評価および剥離剤の選定方法の検討</li> </ul>					
2) 木材の有効利用に関する研究					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 木材及び難燃薬剤処理木質材料等の劣化メカニズムおよび劣化評価方法</li> </ul>					
3) サステナブルデザインに関する研究					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 汚れにくい外壁デザインの提案</li> <li>・ 遮熱・断熱塗料の性能評価方法の検討及びその評価</li> </ul>					
4) 歴史的建造物の維持保全に関する研究					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 歴史的建造物の材料調査および補修方法の提案</li> <li>・ 伝統材料の品質および施工方法に関する研究</li> </ul>					
5) 超高層建築における大規模修繕に関する研究					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 超高層建築物に使用されている塗料やシーリング材の劣化メカニズムの解明</li> <li>・ 超高層建築物の環境調査</li> </ul>					
1) Kaori Nagai, Motoki Imazeki, Yasuaki Kaneko & Yuuki Kawai, Environmental Improvements for Renovation Work Using Laser Scraping, 31st Annual Conference of the International Group for Lean Construction, (IGLC31), 2023					
2) 市山大輝, 伴享, 永井香織, 末竹泰土, レーザを用いたコンクリートはつり技術に関する基礎的研究, コンクリート工学会年次論文集Vol.45, No.1, pp1588-1593, 2023					
3) 高橋 愛枝, 陣内 浩, 黒岩 秀介, 永井 香織, 松井 勇, 外装用木材の屋外曝露による目やせと割れに関する基礎的研究, 日本建築学会構造系論文集, Vol.88, No.804, pp161-169, 2023					
キーワード	サステナブルデザイン 環境改善 維持保全 劣化メカニズム				
SDGs17番号	③, ⑧, ⑨, ⑩, ⑪, ⑫, ⑬, ⑰				

資格	教授	氏名	廣田直行		
1. 多機能複合化によるコミュニティ施設再編のプロセスと方法に関する研究					
全国814市区に対し行った郵送アンケート調査結果から、53市の行政担当者へのヒアリング調査および26市の施設再生事例調査を完了。これらのデータを基に、地域特性に応じた「施設評価」の策定・使用状況を中心に研究報告をまとめた。					
2. インドネシアにおけるカンボンの居住環境に関する研究					
インドネシアでは、都市の一般的な居住地のことをカンボンkampungと呼ぶ。発展途上地域の都市では「ムラ」的性格をもった居住地のことを一般に「都市村落urban village」というが、カンボンはその象徴であり未だコミュニティが存在する。急激な成長の中で都市空間の変容を遂げつつあるスラバヤのカンボンを中心に調査。クリーン・アンド・グリーン・プロジェクトで有名なカンボン・マスパティや線路沿いが不法占拠されているカンボン・ドノレジョ、都心のカンボンであるカンボン・クタンダン、カンボンの生活様式がそのまま展開できることを理念として建設された集合住宅団地ルスン・ソンボ等、様々な形の居住地の住環境を調査した。					
1) Rikako Furuta・Teruki Yamagishi・Kenichi Shinozaki・Naoyuki Hirota and Shuji Funo : 「Considerations on transformation (1984-2018) of kampung and rumah kampung in Surabaya」, Japan Architectural Review, 1 - 16, October 3, 2022					
2) 古田莉香子・広田直行・布野修司 : 「インドネシア・スラバヤのカンボンの変遷にみるKIPの役割とコミュニティ存続の要因」, 日本建築学会 地域施設計画研究, 41巻, 35 - 42, 2023年7月					
3) 大坊岳央・古田莉香子・安藤淳一・若竹雅宏・広田直行 : 「地域課題による公共施設再編に向けた評価方法構築の考察」, 日本建築学会 地域施設計画研究, 41巻, 43 - 50, 2023年7月					
キーワード	コミュニティ 公共ストック活用 施設オープン化 公共施設再編				
SDGs17番号	①, ③, ⑪				

資格	教授	氏名	藤本利昭	
<p>建築物の構造安全性および耐震安全性を中心に研究を行っている。</p> <p>特に近年では、コンクリート充填鋼管構造（以下、CFT構造）を中心とした合成構造の研究開発に取り組む他、昭和初期を中心とした歴史的建造物、近代建築の構造性能評価、更には鋼構造の新たな合理化工法の安全性に関する研究も行っている。</p> <p>CFT構造の研究は、CFT構造の構造設計を行う際の指針となる日本建築学会「コンクリート充填鋼管構造設計規準」の策定に向けて、新たなCFT構造の研究を継続的に進めている。本研究の成果は、今後日本建築学会において新たに作成されるCFT構造に関する設計規準に盛り込まれる予定であり、研究はまとめの段階にきている。</p> <p>更に歴史的建造物、近代建築の構造性能評価に関する研究に関しては、これまで大正時代末期から昭和初期にかけて設計・建設された海軍建築を中心に、文献調査や現地調査、構造実験を行ってきたが、ここ数年は本学部の図書館を代表とする近代建築の構造設計・構造性能に関する研究もスタートしている。</p> <p>また、仮設材を対象とした新しい工法の検討も継続的に行っており、さらに発展させた鋼構造の合理化構法としての研究にも着手している。</p>				
1) 戸梶剛志, 藤本利昭, 日本大学生産工学部図書館の構造性能に関する研究 -空中架構方式の構造解析-, 第15回 複合・合成構造の活用に関するシンポジウム, (CD-ROM), 2023年11月,				
2) 山中美穂, 藤本利昭, 水野僚子, 解体調査に伴う旧海軍技術研究所科学及電気研究場の構造に関する研究 -使用材料の分析-, 日本鋼構造協会鋼構造年次論文報告集, 第30巻 (CD-ROM), 2022年11月				
3) 大石琴, 藤本利昭, 堀紗友梨, 角形CFT柱梁接合部通しダイアフラムに関する実験的研究, コンクリート工学年次論文集, 第44巻・第2号, pp. 703-708, 2022年07月				
キーワード	建築構造	合成構造	構造性能	耐震性能
SDGs17番号	⑨, ⑪, ⑫			

資格	教授	氏名	師橋憲貴	
<p>経済産業省製造産業局素材産業課の砕石等統計年報により近年の骨材の生産状況をみると、砕石は用途別で道路用およびコンクリート用が大半を占め、割栗石などその他用が僅かとなっている。一方、再生骨材の生産量は砕石のその他用と同程度で僅かである。再生骨材の生産量の用途別では道路用がほとんどで、コンクリート用の再生骨材の生産量の再生骨材の生産量に対する割合は極めて少ない。資源循環型社会の推進の観点から日本建築学会は2014年に「再生骨材を用いるコンクリートの設計・製造・施工指針（案）」を発行している。この指針（案）の第11章には鉄筋コンクリート部材に用いる再生骨材コンクリートLという章が設けられており、低品質の再生骨材Lの鉄筋コンクリート部材への利用拡大に向けて検討の成果が盛り込まれている。</p> <p>本研究では、地下構造部材となる場所打ちコンクリート杭にコンクリート用の再生骨材の普及を目指して低品質再生骨材コンクリートを使用し、さらに構造耐力上の補強効果を期待してビニロン繊維を添加した曲げせん断試験体に逆対称加力を作用させた曲げせん断実験を行い、曲げせん断性状について検討を行った。指針（案）では、乾燥収縮が懸念される再生骨材コンクリートは杭などの乾燥の影響を受けにくい構造部材への適用を推奨していることから、乾燥収縮ひび割れの発生が曲げせん断性状に影響を及ぼすか検討した。</p>				
1) 師橋憲貴, 小川敦久: ビニロン繊維が添加された低品質再生骨材コンクリートを用いた場所打ちコンクリート杭の曲げせん断性状, コンクリート工学年次論文集, Vol.44, No.1, pp.1000-1005, 2022.7				
2) 殿廣泰史, 阿部 忠, 師橋憲貴, 水口和彦: 展張格子筋を用いて高強度無収縮モルタル増厚補強した再生コンクリート柱部材の耐荷力性能, コンクリート工学年次論文集, Vol.44, No.2, pp.331-336, 2022.7				
3) 師橋憲貴, 阿部 忠, 野口博之, 水口和彦: 付着用エポキシ樹脂接着剤を用いたコンクリートと合板の接着一体化に関する実験的研究, コンクリート工学年次論文集, Vol.45, No.2, pp.1057-1062, 2023.7				
キーワード	低品質再生骨材コンクリート	乾燥収縮ひび割れ	場所打ちコンクリート杭	逆対称加力
SDGs17番号	⑨			

資格	教授	氏名	湯 浅 昇
<p>国立研究開発法人科学技術振興機構・国際科学技術共同研究推進事業地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム防災研究分野（開発途上国のニーズを踏まえた防災に関する研究）基礎研究「ブータンにおける組積造建築の地震リスク評価と減災技術の開発」</p> <p>国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「土・煉瓦・石を建築材料とした脆弱な建築の保存再生と展開に関する国際共同研究」</p> <p>基盤研究B「水硬性を有しない副産粉体を大量利用したコンクリートの耐久性向上理論」</p> <p>JFEシビル「スラブコンクリートの品質」</p> <p>日本プロロング「ひび割れ防水」</p> <p>信越ポリマー「シリコン材によるRC造の保護」</p> <p>ケット科学研究所「含水率分布の測定できる機器の開発」</p> <p>トッパン・フォームズ「RC構造物の維持管理におけるRFID技術の適用」</p> <p>この2年間に研究の柱にしたものは、①暑中期のコンクリートの物性、②コンクリートの含水率測定方法の開発、③仕上材のRC保護効果、④RC模擬部材の暴露、⑤RC造の耐用年数評価、⑥防水層のふくれメカニズム解明、⑦安全な階上解体の模索等である。</p>			
1)野中英・湯浅昇：ドリル削孔を用いた構造物コンクリートの吸水試験方法の提案：日本建築学会構造系論文集，第88巻，第806号，pp.558-566，2023年4月			
2)N.Yuasa：Non- destructive Testing Methods for Water Content of Concrete：State-of-the-Art in Japan, Seventh US-Japan NDT Symposium, Invited paper, 2022.8			
3)Noboru YUASA：Application of Crushing Method to the Demolition of High-strength and Ultra-high Strength Concrete Structure, Journal of the College of Industrial Technology, Nihon University, Vol.55, No.1, pp.1-10, 2022.6			
キーワード	コンクリート 耐久性 非破壊試験 解体		
SDGs17番号	⑧, ⑨, ⑩, ⑪, ⑫, ⑬, ⑭, ⑮, ⑰		

資格	教授	氏名	渡 邊 康
<p>イタリア地方集落の空家を活用したアルベルゴ ディフーズの分散の状況と体験に関する研究</p> <p>イタリアの8割を占める山地や丘陵地の頂などには小さな集落が無数にあり、現代では交通の便が悪く仕事も少ないため過疎化と高齢化が進んでいます。しかし集落の景観は素晴らしく人々の暮らしはスローライフとして見直されているため、環境と生活を維持するために空家を客室や食堂・レセプションに改修し「集落全体をホテルに見立てる」というアルベルゴ・ディフーズ（分散型ホテル）という取り組みがあります。それはベッドを提供するだけでなく、住人と同様の家に滞在し、旅行者が村の生活を体験することに特徴があります。</p> <p>2014年から4回の実地調査によって、宿泊施設の分散の状況と、運営者や住人の取り組みと、旅行者の体験の内容との関係を明らかにし、住民の間に客室が細かく分散しているAdiが、一般の宿泊体験とは異なり旅行者の体験に独自性をもたらすことを調査します。さらに、村の路地で詩の朗読で行うポエトリーナイトや役者のいる街角が演劇空間となる演劇など屋外の集落環境を利用したイベントがよく行われたり、改修において古いものは汚れを残し新しい設備などを対比させるなど、他のホテルは白くきれいに整えてしまい良くあるリゾートホテルと変わらなくなってしまうのと比べると他では得られない体験を作り出そうとし、日本の地方再生にも参考になると考えます。</p>			
1)渡邊康， イタリアの民泊による集落再生—アルベルゴ・ディフーズ,第27回R&R建築再生展2023/5/31～6/2			
2)			
3)			
キーワード	アルベルゴディフーズ 室内温熱環境 まちの再生 住宅設計		
SDGs17番号	⑧, ⑪, ⑫		

資格	准教授	氏名	亀井靖子
<p>(1) 竣工から35年を経過した近現代建築を主とした建物の維持保全について、その普及を中心に研究・取り組みを行っている。2022年度DOCOMOMO Japan選定建築に選ばれた日本大学図書館生産工学部分館については、その特徴を市民にも分かりやすく説明した冊子を作成し、見学会等も実施した。さらに、DOCOMOMOがオランダ発祥の国際的な学術団体であることから、英語と中国語の翻訳冊子も作成した。</p> <p>(2) 日本建築学会建築教育委員会の近現代建築アウトリーチWG主査として2021年度から建築の普及に関する取り組みを行っている。市民が積極的に建築に関わることで街が活気にあふれ、建物や景観が健全に継承されることを目指している。</p> <p>(3) 住宅地、街並みの維持保全に関するものとして、2023年度から佐倉市と共同し「中古住宅リフォーム支援事業」の成果や課題についての調査研究を行っている。2023年度には集合住宅におけるリフォームの事例と傾向をまとめた。2024年度は戸建住宅を対象に分析を行う予定である。</p> <p>(4) 和室の世界遺産的価値に関する研究では、学生を対象に和室に関するアンケート調査を行い、若者の和室離れの要因を明らかにした。また、日本建築学会「日本建築和室の世界遺産的価値特別調査委員会」から派生した「現代・和室の会」において、生活に根付いた和室文化の継承に繋がる活動を、東京・京都・名古屋などを中心に実施した。</p>			
1) 鈴木あるの, 亀井靖子, 桐浴邦夫, 松村秀一: 外国人にとっての和室-畳の実用性と持続性, 住宅総合研究財団研究論文集, No.50, p.185-196, 2023年			
2) 亀井靖子, 櫻田祐理: 代官山ヒルサイドテラスを起点とした横文彦作品の最大透過空間層の構成と建築空間評価に関する研究 透過空間層を用いた奥性・重層性に関する空間評価 その1, その2, 日本建築学会大会梗概集, p.1117-1120, 2023年7月			
3) 亀井靖子: 透過空間層からみる代官山ヒルサイドテラスの空間構成-空間の奥性の可視化・数値化, 日本建築学会技術報告集, 29巻・71号, p.412-417, 2023年			
キーワード	近現代建築 維持保全 住宅地 和室		
SDGs17番号	④, ⑧, ⑪, ⑫, ⑰		

資格	准教授	氏名	篠崎健一
<p>建築設計実務とフィールドにおける研究に基づいて、空間創造の可能性を探究している。</p> <p>■ 研究助成基盤研究 (C) デザイン学関連「行為の概念に注目した建築空間のありたき姿の形の決定に関する実地の経験に基づく探究」を継続遂行している。沖縄の離島集落において、地区に現存する琉球民家を実測し居住者の語りを採集することにより、居住者が居住空間を改修する行為を定式化して理解し、改修による民家の空間変容を体系的に表現することを目指している。</p> <p>■ 下記成果1) は上記研究に並行する研究成果である。民家の空間構成特徴を、相互視認性に基づき数学的に表現するVGA (Visibility Graph Analysis) を用いて分析し、実際に観察して得られる居住者の行為の分布を重ね合わせることにより、科学的客観性 (空間の物理的構成の分析) だけでは語り得ない空間の意味や質を語ることの可能性を、フィールド調査のデータに基づいて明らかにしている。一連の研究は、人が住むことが如何に周囲のものごとと関係をつくり、それにより人が住む場所を定めるかを、建築の視点から明らかにしようとしている。建てることと住むことの一体となった意味を探究しようとしている。</p> <p>■ 建築をこれから学ぶ者やひと通り学んだ者を対象として、著書 (共著) 『建築ってなんだ?』, 中山繁信, 篠崎健一, 松下希和, 柿沼整三, 長沖充, 山門和枝, 片岡菜苗子, オーム社, 2022.4.を出版した。実務と教育における建築に関する理解と気づきを平易に記し建築の奥深さを説いている。</p>			
1) Kenichi, SHINOZAKI, Haruyuki, FUJII, Exploring Relationships Between Locations of Daily Activities and Permeability of Spaces Using Visibility Graph Analysis, Taking Vernacular Houses in Izena, Ryukyu As Examples, CAADRIA2023, 23, March, 2023			
2) Rikako Furuta, Teruki Yamagishi, Kenichi Shinozaki, Naoyuki Hirota, Shuji Funo, Considerations on transformation (1984-2018) of kampung and rumah kampung in Surabaya, Japan Architectural Review Volume 6, Issue 1 First published : 27 October 2022			
3) 篠崎健一, 藤井晴行, 行為を特徴づける概念に着目した伝統的琉球民家の炊事屋空間改修の特徴, 日本建築学会大会2022 (北海道) 梗概集2022巻, pp.157-158			
キーワード	デザイン 空間図式 行為 住む・住まう		
SDGs17番号	⑪		

資格	准教授	氏名	山岸輝樹		
<p>1) インテリア空間のイメージ評価構造から見た和室イメージの研究  和室を含む一般的な住宅のインテリアについて、市民によるイメージの評価を調査、インテリア空間イメージの評価構造を把握し、その中で和室がどのようにイメージされているかについて明らかにすることで、現在の日本人が考える和室の概念を明らかにする研究に取り組んでいる。</p> <p>2) 郊外住宅地における共住者像と生活環境の変容に関する研究  東京近郊の郊外住宅地において進む高齢化・少子化やそれに伴う外国人やひとり親世帯の移動といった居住者像の変容を捉えつつ、それにとまなう生活環境の変容に関する研究に取り組んでいる。特に中年期から高齢期のライフスタイルの変化と地域資源の関係性からみた住環境評価、エンプティ・ネスト期（子世代の独立以降）の居室活用に関する調査、千葉北西部における外国人就労者の居住環境に関する研究などに取り組んでいる。</p> <p>3) 地域の居場所となる地域施設に関する研究  地域に開きコミュニティの居場所となることをめざすようになってきた地域施設では、何を指しどのような空間を計画されているか明らかにすることに取り組んでいる。現在は地域の居場所となることを標榜する図書館及び福祉施設について調査を進めている。</p>					
1)服部岑生, 山岸輝樹, 鈴木雅之, 和室のイメージの構造 日本のインテリアの味わいと持続性, 日本建築学会計画系論文集, 第88巻, 第807号, pp.1551-1561, 2023					
2)Rikako Furuta, Teruki Yamagishi, Kenichi Shinozaki, Naoyuki Hirota and Shuji Funo, Considerations on transformation (1984-2018) of kampung and rumah kampung in Surabaya, Japan Architectural Review, Volume6, Issue1, First published : 27 October 2022					
3)菅澤 梨乃, 山岸 輝樹, 「みらいの福祉施設建築プロジェクト」助成決定事業を対象とした地域に開かれた施設計画に関する研究, 日本建築学会大会 学術講演会,p.389-390,2023					
キーワード	空間イメージ	和室	郊外住宅地	地域施設	
SDGs17番号	⑪, ⑫				

資格	専任講師	氏名	鎌田貴久		
<p>高密度繊維板（HDF）を使用した耐力壁に関する研究  木質材料の一つであるMDFは、木材を解繊し、その後固めることで作成される。近年木質構造の高強度化が進められる中、MDFをより高密度にしたHDFの可能性に関する研究を行う。  通常より高い密度のMDFであるHDFを作成し、その物性を確認する。材料としての性能として、引張り・曲げ・せん断の試験を行いさらに接合に関する検討を行う。  木質構造は、材料強度のみならず接合強度がその性能を決定する。このことから接合部の最適な組み合わせの検討を行う。</p> <p>1. 住宅への応用に関する検討：住宅の耐力壁に使用する面材としての利用を検討する。  その際の適切な接合具および接合間隔に関する検討を行う。</p> <p>2. 中大規模構造への利用に関する検討：積層することによって厚板を作成し、中大規模建築物における利用を目指し、高強度の接合部を有する木質材料の研究をおこなう。</p>					
1)山田 達彦, 青木 謙治, 稲山 正弘, 鎌田 貴久, 青島 啓太, 西山 直秀, 高密度 MDF の支圧性能に関する実験的研究, 第74回日本木材学会大会 (京都大会), 2024年3月13日					
2)鎌田貴久, 高密度乾式繊維板を用いた耐力壁性能に関する検討, 日本大学生産工学部第56回学術講演会, 2023年12月9日					
3)胡 修斉, 鎌田貴久, 面材張り耐力壁における微振動特性に関する研究, 日本大学生産工学部第56回学術講演会, 2023年12月9日					
キーワード	木質構造	MDF	耐力壁		
SDGs17番号	⑨, ⑪, ⑫				

資格	助教	氏名	福村 任生		
<p>1) 長野県伊那地方における文化的景観の総合的研究  長野県伊那地方における歴史的景観を文化的景観として評価し、都市および農村の持続再生を目指す研究。現在の取り組みは、1) 飯田市遠山地方の和田の町並み調査と下栗・八重河内・山原の斜面集落調査、2) 阿智村清内路・駒場の町並み調査を実施している。</p> <p>2) 歴史的景観の実証的復原方法に関する研究  日本の景観構造の歴史的変容過程については、従来では中近世の絵図を用いた研究があったが、これらは非定量的な分析にもとづき、全体的傾向を論じたものに過ぎない。GIS等のデジタル空間分析ツールを用いた、旧土地台帳や旧地籍図を用いた実証的景観研究の方法については、基本的な史料評価を含めて十分な検討がなされていない。本研究では、明治20年代の伊那地方における旧地籍図の空間史料としての評価ならびにそれに基づく歴史GISによる景観復原の方法を研究している。</p> <p>3) 20世紀イタリアにおける歴史的環境の再評価とその理論形成に関する研究  1970年代からイタリアでは旧市街や伝統的農業景観の保全に向けた都市計画の理論と実践の面で国際社会をリードし、日本における都市研究にも深く影響を与えている。しかし、そうしたイタリア都市計画の理論は1960年代以前の建築理論から発展したものであり、根幹にある思想背景は明らかにされていない。建築家サヴェリオ・ムラトリー（1910-1973）を中心に研究を進めている。</p>					
1) 福村任生, 文化的景観としてのアゾロ, シンポジウム「イタリア都市史研究への挑戦—その軌跡と展望」(イタリア文化会館), pp. 33-36, 2023.7					
2) 福村任生, 長野県下伊那地方における街道沿い町場の計画寸法に関する比較論的考察—飯田とその近郊の町場—, 日本建築学会大会学術梗概集(京都), 2023.9					
3) 福村任生, 伊那地方における街道沿い町場の立地環境と計画寸法, 宮田宿の歴史的建造物—信州伊那街道・宿場町の歴史文化遺産, pp. 161-173, 2024.2					
キーワード	文化的景観 歴史的町並み 都市再生 歴史GIS				
SDGs17番号	④, ⑧, ⑪, ⑫, ⑮				

資格	助教	氏名	古田 莉香子		
<p>1. インドネシア・スラバヤにおけるカンボン改善事業の展開に関する研究  インドネシアのいわゆる都市村落である「カンボン」と呼ばれる低所得者層が多く居住する居住地区を対象に、KIPと呼ばれる居住環境の改善をはかるための施策が行われている。インドネシアの激動の時代変遷とともに、かたちを変えながら実施されてきたKIPと、現在まで続く新たな施策への展開について、カンボンのコミュニティの視点から研究している。</p> <p>2. 公共施設再編における施設評価に関する研究  全国の自治体で、さまざまに行われている公共施設再編における施設評価について、地域特性に応じた評価項目の検討を行っている。全国へのアンケートおよび施設調査を実施し、施設再編の実態から計画プロセスおよび施設評価項目についての課題点について明らかにし、地域特性や施設実態のパターンから最適な施設評価の方法についての検討を行っている。</p>					
1) 古田莉香子, 広田直行, 布野修司, インドネシア・スラバヤのカンボンの変遷にみるKIPの役割とコミュニティ存続の要因, 日本建築学会地域施設計画研究41, pp.35-42, 2023.7					
2) 大坊岳央, 古田莉香子, 安藤淳一, 若竹雅宏, 広田直行, 地域課題による公共施設再編に向けた評価方法構築の考察, 日本建築学会地域施設計画研究41, pp.43-50, 2023.7					
3) Rikako Furuta, Teruki Yamagishi, Kenichi Shinozaki, Naoyuki Hirota, Shuji Funo, Considerations on transformation (1984-2018) of kampung and rumah kampung in Surabaya, Japan Architectural Review, Volume 6, Issue 1, 2022.10					
キーワード	居住環境改善 都市村落の持続可能性 公共施設再編 施設評価				
SDGs17番号	⑪				